愛知工業大学研究報告
第 53 号　平成 30 年

《忘れられた巨人》に隠された希望

The Hopes Hidden in *The buried Giant*

陶　　友公†
Tao Yougong†

Abstract：*The buried Giant* is the most recent novel of Kazuo・Ishiguro. Like all of the other works it is very emotional. The end of the story is very sad. But the author has hidden a lot of hope and wish in the story. This article tried to find them out.

１．緒言

《忘れられた巨人（The buried Giant)》は昨年ノーベル賞に輝いたカズオ・イシグロ（Kazuo Ishiguro）唯一の、主に第三人称視野で書かれた長編小説である。その中では、ゲルマン人が主とする今のイギリス国家の成立以前におけるイングランドを舞台に、主人公アクセル（Axl）とその妻ベアリトス（Beayrice）という老夫婦が息子の住む村へと言って始まった不思議な旅の物語が書かれていた。当時のイングランドにはグエグル(Querig)という雌龍がいて、その吐息で形成される霧によって、人々が健忘になっているという。実は一昔、ブリトン人の名君アーサー王が、魔法師マーリン（Merlin）の計略を取り入れて危険極まりない雌龍を穴に陥れて魔法をかけ、その吐息を利用して直前にあったサクソン人への殺廖を人々の記憶から覆い隠したのであった。そのおかげでその国に住むブリトン人もサクソン人も平和に生活していたが、グエグルの霧は人々を一様に健忘にさせるので、その影響はいろいろな形で表れてきている。例えば、老夫婦は息子の住む村へ行くと言っているが、実はそのような村が一体どこにあるのか、不明のままであった。

彼らが旅立ったのと時を同じくして、ウィスタン(Wistan)という、サクソン人の武士がこの地に入ってきた。イングランドを目指して進軍してきたゲルマン王の命令を受け、雌龍を殺してこの地で生活していたブリトン人の悲惨な過去に対する記憶を呼び覚まし、自分らの征服に応じて呼応を興すためであった。

ウィスターはその地で今は亡きアーサー王から直にグエグルを保護する命令を受けてきた老騎士ガウェイン(Gawain)との間での攻防が繰り広げられるが、その中へ旅するアクセルとベアリトスが遭遇し、巻き込まれていく。その中で彼らの過去への記憶が次第に鮮明になって行き、旅の目的地もあきらかになってくる。

この小説の中で、少なくともガウェインとマーリンという二人の人物は、一連のアーサー伝説の中にあった人物であり、そして、この小説の記述は、伝説に秘められている中世前期の歴史状況にかなり忠実であるという[1]。

しかし、上述の雌龍のほかに、鬼や死後の地を象徴する神秘な島など、現在では、現実なものと看做されないものが多数現れる。出版早々から「ファンタシック」な要素をたくさん取り入れた作品だという指摘があったが、作者自身がその作品を「ファンタジー小説」に分類されるのが嫌がっていたという[2]。

もちろん、この小説の主題となる「記憶」というのは、方々論述されてきたようにイシグロの全作品を通して取り扱ってきたものである[3]。そしてその中で取り扱っている民族間の葛藤や征服と被征服の歴史なども、今現在多くの大陸国家の現実問題に通じている。しかし、これだ

†　　愛知工業大学　基礎教育センター（豊田市）

[1] 伊藤盡、「生き埋めにされた伝説」、《カズオ・イシグロの世界》、P.203 - P.213、水声社、2017 年、東京

[2] 大森望「カズオ・イシグロとジャンル小説の複雑な関係」、別冊宝島編集部編、《カズオ・イシグロ読本》、P.130 - P.137、寶島社、2017 年、東京

[3] 参照：「新刊展望」編集部編《特集 カズオ・イシグロ『忘れられた巨人』：失う記憶、取り戻す記憶》、新刊展望、2015、東京

けでは、この小説は《ファンタジー小説》ではないと言い切れるのであろうか。それは、小説の作者が単純にプロットの面白さや結論の正しさを追求するあまり、自分が直視してきた真実の多重性、意外性、そして人物の性格発展における一貫性をなおざりにしているかないかにかかわってくるであろう。

《忘れられた巨人》では、一見とても愛し合っていた老夫婦は、小説の終わりで別れ別れになった。ベアトリスはグエグルが殺されてから、夫とのいざこざで我が子をなくしたことを想起し、そして夫が自分の最愛なる子供への墓参りを長い間禁じたことも想起した。それ故に、今まで持ちつ持たれつここまでに来た二人の将来を考えるより、まずは最愛の子のいる世界へ行ってみることが優先した。その一方では、過去において自分の何たるものかを思い出し、去っていく妻の最後の旅路を同伴しながら、もっと広く広大な世の中の将来を案ずるようになる。そして、世の中はグエグルが殺されてしまったので、間もなく血なまぐさい過去の歴史が呼び起され、それに乗じてサクソン人が進行し、ブリトンの村々が血の海となるであろう。というのは小説の終わりの場面である。

こうしてみると、確かに物語は人物の性格発展の必然性と、歴史から見た必然性が保たれている。しかし、何という悲しい小説であろう。このままでは、何の希望も持てないのではないか。いや、そうではなかった。小説の中では、グエグルの殺される前に、作者は主人公アクセルの口を通しても、またアーサー王の老騎士ガウエインや、修道僧など様々の人々の口を通しても、何回も警告してきた：グエグルの霧で忘れられたのはいい記憶だけではなく、悪い記憶も一緒だ、と。しかし、その言葉を逆にしても読めるはずである。グエグルの消滅によって起こされたのも悪い記憶だけではなく、いい記憶も一緒である。そして更に良いことには、もうすでにグエグルによって記憶が奪われないのである。この小論では、以上な角度に立って、イシグロがこの小説で隠していた希望を論じてみようと思う。

なお、この小論の著者が日本人ではないため、日本語訳はすべて土屋政雄先生の訳（早川書房 2015 年版）を引用した。

２．ウィスター

ゲルマンの騎士ウィスターは、グエグルを殺した張本人である。イングランドに向って進軍してきた王の命令を受けて、その地に住むサクソン人に過去の悲惨な歴史に関する記憶を起こすべく、この地に入り、グエグルを殺す使命を果たした。

その任務を遂げる過程に於いて、彼の持つ冷静さや策略、そして敵に対する冷酷なまでの殺意がよく描かれていた。修道院に於いて、彼は敵が必ず追ってくると予期し、また僧の警告も受けながら、逃げようとはせず、ゲルマン先人の残した仕掛けを巧みに利用して、自分より何倍も多い敵の全員を無情に焼き殺したのであった。

彼がそうした背景には、実は彼自身の少年時代に関する「悪い記憶」があったのである。

ウィスターの喚起したい過去の記憶は、アーサー王がサクソン人との協定を破って、奇襲をかけ、そして大勝を収めた先の戦争であった。そのケルンの山の下で行った戦争の中で、ブリトン人は「協定(Agreement)」を破って、サクソン人の女や子供まで殺していたのであった。そしてその中で、ウィスターの母親もブリトン人に連れられて行った。そのせいで少年時代の彼は、ブリトン人の村で生活しなければならなかった。そこで彼は騎士となるための学校に入ったが、たった一人がサクソン人であるゆえに様々な虐めや侮辱を受けた。そして、彼はこれらの虐めや侮辱に対する復讐をするために、ブリトンの村から脱出してサクソン人の国へ行き、そこで騎士になり、また戻ってきたのである。そして、彼の到来を厳密に防衛しながらも、無慈悲に懲らしめられたのは、ブリトン人の村にいた時の領主の息子で、率先して彼に侮辱と虐めを強いていたブレヌス（Brenus）卿であった。

しかし、グエグルを殺した彼を最初に襲ったものは、任務を成し遂げた解放感と、ついに勝利を得た誇りの感覚ではなかった。彼自身が言う：「あなた方ブリトン人の間に長くいすぎたのかもしれません。あなた方のなかの卑怯者を軽蔑し、勇気ある人や賢い人を尊敬し、愛してきました。幼いころからずっとです。いまこうして震えながらすわっているのは、疲れたからではなく、この手でいま何をしたかを考えるからです。来るべき世で、わたしは心を鋼鉄に鍛え上げねば、王のためには役立たずの戦士に堕してしまいます」[4]と。

[4] Perhaps I’ve been too long among you Britons. Despised the cowardly among you, admired and loved the best of you, and all from

彼は自分が「正義の復讐(justice and vengeance)」と呼んでいた将来来るべき征服の悲惨を正視できなかった。そしてそのような気持ちを「恥ずべき弱さ(weakness shames me)」と呼んでいたのである。しかし、この「恥ずべき弱さ」こそが、被征服されようとする側にとっての望みであろう。

ガウェインはかつて、いつも明晰な頭脳をもって周到な計画を立てて敵に向かっていたウィスターに向かって、あまりグエグルの影響を受けないねと聞いたことがある。それに対してウィスターは、自分のこういう特質が買われて王から今の任務を下されたのであるという。しかし、以下の解釈もできるであろう。来たばかりの時は、彼には自分の復讐と王の任務があった。それらを成し遂げるためには、ブリトン人に対する良い記憶を忘れたほうがよかった。そこで、グエグルの霧はむしろ彼の役に立ったのである。そしてそれらを成し遂げ、グエグルもいなくなった今、まさに彼には懐かしいと思われるはずの思い出が一気に噴出してきたのではなかろうか。そして、そのような思い出こそが、かつてブリトン人がサクソン人に仕掛けたような惨劇を防ぐ希望となるのではなかろうか。

３．エドウィン

ウィスターは自分の「恥ずべき弱さ」を回避するために弟子を入れた。その名はエドウィンである。

エドウィンはウィスターと同様、母親をブリトン人に連れられて行かれたが、それは戦争の時ではなかった。彼は戦争以降の時代しか知らない少年である。それ故か、母親も単なる知らない人と一緒に「旅をしている(traveling)」と思っているのであった。

彼は同様、戦士としての才能と胆略に優れていた。そして、何よりも冒険が大好きのようである。彼とウィスターとの出会いは、ちょっとした劇的なものであった。母と別れた彼は伯母と一緒に住んでいた。ある日二人のいとこと一緒に釣りに行った。そこで「鬼」と遭遇し、一人のいとこは死に、もう一人は足にけがをしてしまう。そして、そのあとの話は少し込み合ってくる。

まず、小説では、「地の文」で書いていない。一部分はたまたまそこを通過し。負傷したいとこを救出して村に送ってきたウィスターの話として記されている。それによれば彼は「鬼」に「攫われて行った」。そこで、村で大騒ぎになり、二人の若い人をウィスターに付けて、再度彼を救出に行った。もう一部分は、エドウィン自身の回想として書かれていた。勿論その回想は、グエグルの霧の影響があって、ぼやけたものとして書かれていた。それによれば、彼は「鬼の巣穴」にある「檻」の中にいた。その「檻」は事実上「鬼」の攻撃から彼を守る役割をしていたのである。そして、その「鬼」というのも「大きさが鶏ぐらい」なものであった。それは毛のない鶏のようで、蛇のような頭を持っていた。このような描写から作られたイメージは「鬼」というより「竜」に似ている。そして、この「鬼」には「嘴がない」。爪と威力の大きい尾を武器に使っていた。そこで、このぐらいの「鬼」に十二歳になる少年が晒されるのかとの疑問が現れる。それにそこから彼のことをウィスターはずっと「我が若き同志」と呼んでいるところから考えると、寧ろウィスターが彼をわざと「鬼」の巣穴の「檻」に待たせたのではないか。それには少なくとも二つの理由がある。一つには二度目の「救出」を演じさせるために、もう一つは、彼の勇気を試すために。そしてエドウィンとして、或いは最初からウィスターとしても、三つ目の目的があった。

エドウィンは、村で伯母と一緒に生活していた。そしてサクソン人の間では、「悪魔に噛まれた者はいずれ悪魔になる」という迷信があった。檻の中で「鬼」と対峙するには、擦れ傷などは免れない。もしそれを「悪魔に噛まれた」と村人に信じさせれば、彼はおそらくその村にいられなくなるであろう。そこでウィスターが簡単に彼を村から連れ出すことができる。エドウィンとしても、かねてから戦士に憧れていたので、寧ろ自分から進んでこの結果を受け入れたに違いない。現に、ウィスターはそうしたのである。彼は最初に村に現れた時はその「鬼」が「さすがに悪魔」であるかのように村人に信じさせ、そして次の時にはエドウィンが傷を負ったことを村人に伝えた。そして目的も達成できた。彼の傷のことを聞くと、村中の人が彼を敵に回し、今まで親切にしてきた伯母までも、彼を殺そうとしたが、長老アイバーの計らいで、ウィスターと一緒に旅に出た。

そして、ウィスターには第四の狙いがあった。彼はおそらくその「鬼」が竜であることを見抜いていたであろう。そして、竜に噛まれた人は、自然に竜たちを引き付ける能力があり、逆に自分自身も竜引き付けられていくそ

---

a tender age. And now sit here, shaking not from weariness, but at the very thought of what my own hands have done. I must soon steel my heart or be a frail warrior for my king in what's to come.'

Kazuo Ishiguro, *The Burred Giant,* P.338, Faber & Faber, 2015, London

愛知工業大学研究報告,第 53 号, 平成 30 年,Vol.53,Mar,2018

うである。それゆえ、ウィスターはエドウィンを弟子として一緒に旅させれば、自然に雌竜へのガイドを得たことになるのである。

ウィスターのこの狙いも的中した。エドウィンは竜に傷付けられてから、ときどき生みの母の声を聴くようになった。そして、その声は彼にいろいろと指図を与え、自分を助けに来るように求めている。そして、その時のグエグルは超能力的になる。ウィスターはまさに彼のこの超能力に頼って、エドウィンの居場所までたどり着いたのであった。

しかし、このような彼は、本当にウィスターの「恥ずべき弱さ」に打ち勝つことができるのであろうか。いや、違うであろう。

まず、彼が成長してきたのは、ウィスターのいたブリトン人の村と違って、サクソン人の村であった。そこにいた大多数の人々は、「グエグルの霧」のせいで、昔のことを忘れ、ブリトン人と平和裏に暮らしていた。現に危険の中で彼を守り、村を脱出させたアイバー (Ivor) 長老はサクソン人を妻に持つブリトン人であった。そして、或いはウィスターの失算であろうか、彼らの旅中、ずっとブリトン人の老夫婦アクセルとベアトリスが同伴であったこともある。この老夫婦は彼の身の上を同情し、いつも心優しくしてくれていた。それ故に、ウィスターから彼自身もできない「すべてのサクソン人を憎め」という約束をさせられた時に、とっさに思った:「その中でこの老夫婦も含まれているのか」と。

更に、長い間平和裏に暮らしてきたサクソン人の村では、エドウィンは人々の卑怯や軟弱、そして利己的なところを更に多く見てきたであろう。「狼二匹が入ってきた」というだけのことでみんな怯えてしまうような村では、エドウィンはサクソン人自身の多くの問題に悩まされてきたはずである。更には、自分が「鬼に噛まれた」と聞いただけで、「お母さんと呼んでくれ」とまで親身にしてきた伯母までが、躍起となって自分を殺そうとした、そのような経験は彼にいったい何を教えているのであろうか。

こうしてみると、ウィスターの持っている「恥ずべき弱さ」が、エドウィンはすべて捨て切れるものではなかろう。いや、それ以上に持っているであろう。そして、これもまた、以前の悲劇を繰り返さない、もう一つの希望になるのである。

４．アクセル

アクセルもまた、この書で残された希望の一つである。

現在のグエグルの霧によって記憶が奪われ、村人からも軽んじられて、半分それにうんざりして妻と一緒に息子を訪ねる旅に出た老い零れのアクセルは、その昔、まだ親と一緒にサクソン人の村に住んでいた時の幼きウィスターの憧れであった。

その時の彼ももちろん武人ではなかったようではあるが、アーサー王の下で、「無垢の法(The law of Innocent)」を作り、ゲルマン人との「神聖な協定(solemn agreement)」を作り、ブリトン人とサクソン人の間で広めたのであった。それを広めるために、ブリトン人の村々だけではなく、サクソン人の村々も度々訪ねたために、至るところで「平和の騎士 (The Knight of Peace)」として歓迎され、それを見た幼きウィスターが魅了されていたのである。

そして、その「神聖な協定」が守られていた間は、二つの民族が平和裏に暮らしていたという。

しかし、アーサー王は、「悪の循環を終わらせる(sever this evil circle)」ために、マーリン氏の「黒魔法」を採択し、突然自分たちの広めた協定を破ってサクソン人の村々で、無法に女や子供までも殺してしまって、そこを血の海に沈めてしまったのであった。

それ故に、彼自身も気づいたし、ウィスターもあっけなく認めたように、サクソン人から見れば、彼の「法」も「協定」も屠殺の前の欺瞞に見えたのであったが、長い旅路を一緒にした末に、ウィスターは彼の本心が「ブリトン人にもサクソン人にもよかれ」と思ってやったことだと認めたのである。

そこでこの小説の結末について整理してみる必要がある。この小説の大部分は第三人称的に述べられているが、中のいくつかの章は、第一人称で書かれてあった。そして、最後の章も、この第一人称で書かれた数少ない章の一つである。しかも、主要人物の誰からの視野でもなく、「死後の世界」を象徴する「島」へ人を渡す「船頭 (boatman)」の回想の形を取っていた。

「死後の世界」を象徴するこれらの「島」は、まさしく最初に老夫婦の旅の目的地であるかもしれない。その

息子はすでにこの世にいないからである。

そしてこのような「島」では、人々が「平静に日々を送っている」。しかし、常に独りで暮らす形になり、隣に人がいると気づいていても、永遠に会うことがないというが、まれに二人が一つの船で渡されて、永遠に睦ましく暮らしていく例外がある。その例外となる条件は「一生変わらぬ愛情で結ばれている」ことであった。そして、その条件を満たしているかどうかを見分けるのが「船頭」の仕事である。

アクセルとベアトリスの二人は、もちろんその条件を満たしていなかった。昔、ごく短期間とは言え、ベアリトスに不貞事があったのである。そして二人の間でのいざこざが起こり、それを見かねて息子が家出をしてしまったのであった。そしてちょうどその時に流行りだした疫病のために死んでしまったのであった。それを怒りに感じて、アクセルはベアトリスが息子の墓に行くことを禁じ、そして自分もついに行かなかったのであった。

そのために、「船頭」は二人が同時に島へ渡すことを拒み、結局先に渡したのは、最初から息子と再会したい一心で出かけてきた妻のベアリトスであって、アクセルについては、「船頭」は次のように語ってある。

> 「爺さんが水の中を歩いてくる音がする。おれに言葉をかけるつもりかな。仲直りすると言っていたよな。おや、こっちがせっかく振り向いたのに、向こうは見てこないぞ。陸地と、入り江に低くかかる太陽なんか見ている。ま、おれもとくに目を合わせたいわけじゃない。爺さんはおれの横を通り過ぎ、なのに振り返らない。じゃ、陸で待っていてくれたまえ、友よ。おれはぽつりと言った。だが、爺さんは聞いておらず、先へ進んでいく。」[5]

ここで小説が終わっているのである。アクセルも島へ行ったとは言っていない。

イシグロはこの小説のことを「ラブストーリーだ」と言ったことがある[6]。「ラブストーリーだ」とすれば、結末は悲しい。しかし、あの「ラブストーリー」を題とするクラシックなアメリカ映画が表明しているように、「死別」はけっして偉大な愛情に遜色を与えるものではない。

ベアトリスは最初から病身の設定であった。回り道をして修道院へ行ったのも、ベアトリスの看病のためであった。そして、いったん修道院を出て、山のくだりの川で出合った出来事は、危篤の体験だったと解釈できないこともなかろう。そして、「島へ渡る」ことは「あの世へいく」ことの象徴ならば、この「息子のいる村へいく」旅は、ベアトリスにとってはまさに「あの世へ旅」でもあった。その一部始終に於いて、愛する夫に付き添われていた。それは「愛の物語」ではなくてなんであろう。そして、本当に「あの世へ旅立ってしまう」と悟った人の中で、本当に愛する人に一緒に行こうと望めるであろうか。これで二人の間のこのような会話が理解される。

> 「教えておくれ、お姫様」爺さんが言っている。「おまえは霧が晴れたのを喜んでいるかい」
>
> 「この国には恐怖をもたらすものかもしれないけど、私たち二人には、ちょうど間に合ったって感じね」
>
> 「わたしはな、お姫様、こんなふうに思う。霧にいろいろと奪われなかったら、わたしたちの愛は年月をかけてこれほど強くなれていただろうか。霧のおかげで傷が癒えたのかもしれない」
>
> 「いまはもうどうでもよくなくって…」[7]

終わりになったことはどうでもよいのである。

それよりも、ベアトリスに取って、霧が晴れるとともに分かったことには、もう一つある。それは、二人が知り合う以前の、アクセルのことである。彼はいかに大きな夢を抱いて活躍をし、いかに深く傷づいて自分のところに投じてきたかを。

そして世の中の人々もおそらくあの悲惨な戦争と共に、その前に少なくとも短期間の平和があったことを思い出

---

[5] ‘I hear him coming through the water. Does he intend a word for me? He spoke of mending our friendship. Yet when I turn he does not look my way, only to the land and the low sun on the cove. And neither do I search for his eye. He wades on pass me, not glancing back. Wait for me on shore, friend, I say quietly, but he does not hear and he wades on’, P.362 Chapter Sixteen

Kazuo Ishiguro, *The Burred Giant*, P.362, Faber & Faber, 2015, London

[6] 早川書房編集部、「《忘れられた巨人》解説」、カズオ・イシグロ著、石屋政雄訳、《忘れられた巨人》、P.414、早川書房、2015年、東京

[7] ‘Tell me, princess’, I hear him say. ‘Are you glad of the mist’s fading?’

‘It may bring horrors to this land. Yet for us it fades just in time.’

‘I was wondering, princess. Could it be our love would never have grown so strong down the years had the mist not robbed us the way it did? Perhaps it allowed old wounds to heal.’

‘What does it matter now, Axl? ....’

Kazuo Ishiguro, *The Burred Giant*, P.361, Faber & Faber, 2015, London

すであろう。その平和の礎となった「法」と「協定」のことを思い出すのではないか。そして、その「法」と「協定」を作り出し、力づくって広めようとし、それが一方的に破壊された後で一早く復讐の到来を予告したアクセルがまだこの世にいることは、一つの大きな「希望」ではないであろうか。

５．結び

確かに、一旦過去の歴史をわすれさられたら、我々は浅はかになりやすく、目先のことに終始しがちであるが、しかし、それが全部覚えていようと、歳月によって風化していこうと、覚えていることと忘れてしまうこと、そして再度思い出してくることは、人それぞれ違うものである。それ故に、「グエグルの霧」のもたらす忘却が一時的に矛盾や問題を隠すことができても、それを完全になくすことができないのである。

ゲルマン人とブリトン人の間にかつてあった血なまぐさい歴史に対する記憶が、グエグルが殺されてしまうことによって、また人々の中へ戻ってくるであろう。それは「忘れられた巨人」であると作品中のウィスターが言った。

しかし、同じように忘れられたのは、他人への「許し(forgiveness)」であった。これも、過去の記憶によれば、二つの民族の間で協定を結ばせ、平和に導いていく巨大な力の持ち主である。それは、ずっとそれを「説き、実践してきた(spoke and acted)」アクセル本人でさえ忘れていたのではないか。そして今や「許し」に関する記憶も、少なくともアクセルのところに戻ってきた。彼の「心の中にあった」「復讐の望む小さな部屋（small chamber in my heart that yearned for vengeance)」は、妻を子供のいる島へ送り出すことによって完全に開放されたのである。そして彼はいまだに健在である。これこそが、カズオ・イシグロが作品に隠した希望ではないか。

謝辞

愛知工業大学の温かいご招待を頂き、研究員として南京東京大学から参り、この静かな八草キャンパスで一年滞在し、昨年ノーベル賞を取ったイシグロ氏の文学に接する機会ができた。ここに記して心よりのご感謝を申し上げたい。

（受理 平成 30 年 3 月 10 日）